

ムシが増えると トリが集まる

アメリカ・コロラド州の針葉樹の林で、木に穴をあける害虫が発生したとき、まわりからたくさんのかつてのキツツキがこの林に集まってきて、虫を食べました。アメリカでは、キツツキは森林を守る大切な益鳥として保護されているので各所に多く、高速道路が森の間を通っているところでは、かわいそうに自動車に当たったキツツキの死がいを見かけるほどです。だからこそ、周囲からたくさんのかつてのキツツキが集まって、害虫の大発生をおさえることができたのです。日本では、キツツキは立木に穴をあける害鳥だといって、一部の林業の人々にさわかれていますが、どうばかが出てから警官をさがしても急の間に合わないたとえもあるように、目さきよりも先のことを考えたいのです。

このように、ムシを食べるトリは、ある林に害虫が大発生すると、その場所に周囲からたくさん集まってくる性質があります。そして、小鳥は群れをなして住んでいるのが普通ですから、森林の番人として、害虫退治には想像以上の効果をあげているのです。

ヒトには これだけの害虫を退治できない

皆さんは、ヒナ鳥が口をあけて待つ巣へ、親鳥がひっきりなしに出入り入ったりしてエサをあなたえている姿を見たことがあると思いますが、彼らは1日に200~300回、近くでエサが与れる場合には500回以上もエサをはこぶことがあります。

すると、トリたちは、いたいどれくらいの害虫を食べていることになるでしょうか。ドイツの農林生物研究所のレーリッヒ博士が、日本にいるとの同じシジュウカラ、コガラなどで実験した結果は次のとおりです。(1年間に食べる動物質をマッシュカトリにして計算してあります)

シジュウカラ・125,000匹、コガラ・113,000匹、エナガ・96,000匹、キクイタダキのような体重6グラムの小さなトリでも69,000匹、日本のムクドリに近いヨーロッパのホシムクドリは、なんと210,000匹という数字です。また、別の実験では、ヒガラが1日に毛虫の卵を3,000個も食べ、日本でもエナガがキクイタダキの胃から100個以上の虫の卵が見つかった例はたくさんあります。このトリたちの体に対するエサの割合は15~30ペーセントにもなります。

たった1羽のトリでさえ、これだけの大食ぶりです。トリは、ときどき、みのった果実をついぱんだりしますが、害虫は、植物そのものの栄養をまとめて、実をならなくしてしまいます。そこに大きな差があることを、考えていただきたいと思います。

自然のしくみのなかで、トリたちはなくましい食欲を示しています。私たちは、この自然の番人をあたかく見守る義務があります。ヒトには、これだけの害虫を退治できないのですから――。



ヒトの間のひじょうの保護区

財團法人 日本鳥類保護連盟
サンタリー株式会社

●この広告は、財團法人日本鳥類保護連盟の指導を得て、サンタリー株式会社がシリーズとして制作するものです。

自然の番人は大食漢



愛鳥の心が育てるよい環境
(日本鳥類保護連盟第2回入賞受賞作品)

●美しい自然——「庭に小鳥を」のパンフレットをさしあげます。ご希望の方は送料として切手55円分同封のうえ、下記あてお送りください。
〒103-91 東京都中央区日本橋周区内私書箱第231号 サントリー株式会社 愛鳥キャンペーン係